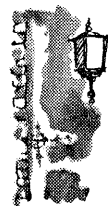


# 幼児の個性と普遍性とに関する考察（その二）

——保育の場におけるめだつ子、めだたない子

の関連と指導——

松 隈 玲 子



## 〈研究の目的〉

幼児教育の目標は、幼児の個性を偏った方向に伸ばすことにあるのではなく、また画一的な集団訓練のみあるのではない。幼児を発達段階に即して、まことにその子らしく、心身ともにゆたかに育成していくためには、十分に個人が尊重され、一人でもみおとされる子どもがないような保育がなされなければならない。

このような立場から、前回はめだたない子に対する保育者のあり方についてのべたが（幼児の教育六十八巻十二号）本研究においては、前回の資料を、同一方法による観察、テスト法などによって再確認しながら、更に、めだたない子の特性、めだつ子との関連などを検討し、めだたない子の実態をよりの確に把握して指導の手がかりとしたい。

## 〈研究の方法〉

① 心理検査（個別田中ビネー式知能検査及び円錐形を用いた家族人形あそび）を本学附属幼稚園児六十八名について行なう。

（方法は前回に同じ）

② 質問調査

学年はじめに園に提出された「家庭生活調査表」および、本研究の資料のために配布した「言語活動調査表」の集計を項目別に行なった。

③ 保育者の記憶にもとづく幼児の行動記録

前回と同じ方法で年長全児の行動記録を週二回、各クラス十名の保育科学生の協力によって行なった。（実習担当クラスでの記録であるので、園児の氏名特徴などはほとんどの者が知っている

る)

#### ④ 交友・あそびの観察

年長全児について登園後、集会活動開始までの自由あそびの状態について観察し、とくに後半においては③にあげられた「記録回数のきわめて少ない子」「毎回記録された子」について重点的に観察を行なった。また、個別テスト実施中に、「いつもよくあそぶ友だち」「仲よしの友だち」の名前をきき、「好きなあそび」「よくしているあそび」などについての面談による調査を行なつて、観察結果への参考資料とした。

⑤ ①④の資料にもとづいて、結果を整理し、望ましい保育の方法を検討する。

#### △研究の結果と考察▽

① 田中ビネー式個別知能検査実施中および人形あそび実施時における、各個人の特徴、検査結果などを集計し第1表のように分類した。集計表作成上の留意点は前回に同じであるのでここでは記載しない。(検査時の態度特徴などの実際の資料は文章で記述しているが、ここでは誌面の都合上、主な特徴を記号化したもの(記す)

人形あそびについては、白ボール紙でつくった円錐形四個を家族人形にみだてて、色ボールの輪を目じるしの首かざりにかけな

がら自由に人形あそびを行なわせた。人形の動き、人形の言葉づけ、および人形の操作などは何ら指示を与えず、自由に行なわれるように配慮した。人形の数の不足を訴える子どもについては、大小の扇形に切りぬいた折紙とセロテープを与えて、検査者と共に必要とする人形を作成して用いた。この人形の作成はとくに女兒には興味をさそうものであったらしく、検査終了後保育室において同じ形の人形を作成してごっこあそびを行なったり、着せかえ人形ふう顔を描いたりして遊んでいるのがしばしばみうけられた。

人形あそびでの会話や動きの中で、とくによく展開することができ、その内容も親和的であるものを◎印、語彙や動きは乏しいが問題点はみうけられないものを空白、会話や動きの中に反社会的な面がみられるもの、また、親子、きょうだい関係で指導することが望ましいと思われたもの、また全くことばも動きもつかなかったものを○印として表わした。

結果比較の便宜上、知能指数の順位に並べ、同点のものは生年月日順に配列したが、これはあくまでも一つの手段であつて、個々の子どものわずかな指数の高低を重視するものではない。

記憶にもとづく観察記録の結果については隔週計五週の観察期間中、一度も誰からも記録されなかつたものを⊕印、ほとんどのものから毎回記録されたものを⊗印、全く記録していないもの

〈第1表〉昭和44年度年長児の参考資料

◎よいと思われるもの  
 ○指導を要するもの  
 ⊕観察記録に記されなかったもの ※毎回記録されたもの  
 △多くのものに記録されないか何人かは毎回記録しているもの

個人No と記号	検査時の特徴		要 注 意	参 考 資 料	個人No と記号	検査時の特徴		要 注 意	参 考 資 料					
	よ い 態 度	い 言 語				よ い 態 度	い 言 語							
1	145	km qp	a	◎	35	114	k	i	ad	◎				
※	2	140	hc kq	a d	36	114	hq	fn		◎	○	△	◎	
※	3	140	ip	a d	※37	114	i	n		◎	◎	◎	◎	1
※	4	139	ki	a	38	114	ki	qm	q	◎	◎	◎	◎	
※	5	138	cd	a d	39	113	kh	al	én	◎	◎	◎	◎	
	6	134	kh		⊕40	113	i	qn	á	◎	◎	◎	◎	2
※	7	132	kp	•	※41	112	hq	a	nf	◎	◎	◎	◎	1
	8	131		a	※42	112	k	a	n	◎	◎	◎	◎	双生児
	9	130	pc		⊕43	112	k		éq	◎	◎	◎	◎	2
	10	130	k	q	⊕44	110	q		h	a d	◎	◎	×	2
	11	129	h	q	⊕45	109	i		h in	a a	◎	◎	×	2
⊕	12	126	i		46	109	kq		dé		◎	◎	△	
	13	126		a	⊕47	109	k		é サタ	◎	◎	◎	◎	3
	14	125	kb		⊕48	108	i		lf a <sup>2</sup>	◎	◎	◎	◎	2
△	15	125	b	a	49	108	i			◎	◎	◎	◎	
	16	125	c	a	※50	108	k		jq	◎	◎	◎	◎	1



と、毎回記録したものの数がほぼ同数であるものを△印として表わした、交友、あそびなどの◎○印は、テスト実施中に併用した交友関係の質問に対する応答と、実際に自由あそび時に観察した結果とを総合して判定の資料とした。

第1表にもつづいて考察をすすめると、前回においては、観察期間中一度も記録されなかった者の数は、全体の約二三%であったが、今回は六十八名中十四名、約二〇・五%である。わずかに回の同一方法による調査結果であるので、このことをもってすべてに關連づけるのは危険であるが、保育者が個々の子どもを十分に把握し、集団の中で全体を均等に観察し指導していくつもりでも、二〇%内外の「みおとされる子ども」ができることの基礎的な資料として取りあげることができる。

また知能との關連においても、知能指数の上位あるいは下位のものよりも中位のものにその数が多いことも前回の結果と同一の傾向を示している。

本研究では、前回に示された結果の再確認をしながら、これを基本として、「一度も記録されなかった子」即ち「めだたない子」についての考察をふかめていくが、単にめだたない子のみをとり出して考えるのではなく、「毎回記録された子ども」即ち「めだつ子ども」との關連づけによつての比較検討をすすめていきたい。これは「めだたない子」は「めだつ子」との關係におい

て存在し、把握されたものであるとの考え方からである。(以下図表作成上、めだたない子のグループをA群、めだつ子のグループをB群」と略称する)

年長組の学年はじめに提出された「家庭調査表」および、本研究の資料のために配布した「言語活動調査表」を参考資料とし、必要な項目を第1表より抽出して、A群、B群の比較調査表をまとめると、第2表のようになった。

A・B両群の内容が均一でないこと(めだつ子、めだたない子と大きな群にわけてはいるが、その原因、現象面での表われ方は個人によつてそれぞれ異っている)両群の数が不均等であり、またわずかな人数での対比であるので、ここでは、統計処理を用い

第2表 A(めだたない子ども) B(めだつ子ども) 両群の比較  
A群=第一表での◎の子ども  
B群=第一表での△印の子ども

1. 誕生月		誕生月	誕生月	誕生月	誕生月
人数	誕生月	4月～6月	7月～9月	10月～12月	1月～3月
A		1	4	3	6
B		4	4	4	8

2. 生下時体重		2.5kg以下	2.5～3kg	3～3.5kg	3.5～4kg	4kg以上
人数	体重					
A		0	4	9	1	0
B		5	5	7	3	0

3. 始歩期		1歳以下	1歳3カ月～1歳6カ月	1歳6カ月～2歳	2歳以上
人数	始歩				
A		3	9	2	0
B		5	9	1	0

4. 始語期		10カ月～1歳	1歳～1歳3カ月	1歳3カ月～1歳6カ月	1歳6カ月以上
人数	始語				
A		2	11	0	0
B		1	15	3	1

9. 交友の選択

人数	選択グループ	A群の者	B群の者	その他の者
	A	11	1	2
	B	3	12	5

10. 言語上の問題点

人数	項目	幼児語幼児音	語いが少ない	表現が少ない
	A	2	4	6
	B	8	1	2

11. 運動能力 (測定による)

人数	項目	すぐれている	普通	やや劣る
	A	1	13	0
	B	6	10	4

12. あそびへの参加

項目		人数					
		A		B			
		1回目	2回目	1回目	2回目		
自発的参加	戸外	個人あそび	A 施設遊具を用いて	4	3	3	
			B 用いない		1		
		集団あそび	A 施設遊具を用いて	1	5		
			B 用いない	3		6	7
	室内	個人あそび	A 遊具教材を用いて		2		
			B 用いない				2
		集団あそび	A 遊具教材を用いて				3
			B 用いない			4	3
	誘われて参加	戸外	個人あそび	A		1	
				B			
		集団あそび	A	3	2		
			B			2	2
室内		個人あそび	A	2		2	
			B				
集団あそび	A	1					
	B						
その他	教師のまわりにいて遊ぶ				3	2	

B. 両親との交わり、あそび

人数	項目	毎日あそぶ	時間のあそび	たまにあそぶ	あそびない
A		1	9	4	0
B		11	3	2	4

5. 食事のすききらい

人数	項目	何でも食べる	たいてい食べる	全く食べないものがある	食べたいものがある	すききらいがひどい	嫌いなものがある
A		5	8	1	0	0	0
B		3	7	6	1	1	3

6. 基本的な生活習慣の自立

人数	項目	自立している	自立しているが行わないことがある	自立してないものがある
A		14	0	0
B		12	6	2

7. 健康状態

人数	項目	健康である	風邪をひきやすい	よく病気になる	持病がある
A		9	4	0	1
B		11	5	1	3

8. 同胞数

人数	同胞	1人子	双子児	2人	3人	4人
A		1		10	3	0
B		7	2	8	3	0

ず、実数によつての比較検討を行なつた。  
 第2表の項目にもとづいて考察すると、誕生月(歴年齢)、生下時体重、始歩、始語期などについてはA群、B群の間に目に立つた差違はみられない。ただし、2の生下時体重において二・五kg以下、即ち未熟児として生まれたものは、B群にのみ五名みられる。しかし、その五名の各々についてみると、二名は双生児であり、あとの三名も現時点での体格は中位で、このことがめだつ原因であるとは考えられない。  
 次に、個人の身辺自立即ち、食事の態度、すききらい、基本的な生活習慣、健康状態などについては、A群の方がすぐれており、

知能面においても、前にものべたように平均値はほぼ同位であるが、別にみるとA群の方が上下のバラつきが少ない。このことから、A群、即ちめだたない子のほとんどの者が、身辺自立面においても健康面においても、また知能力の面においても、年齢並の発達をしており、また能力を備えていることが考察される。このことが一つには保育者の注意をひかないあるいは手のかからないという意味においてのめだたなきをつくり出しているともいえるが、保育者は、手のかからない子即ち放っておいても安心な子と決めてしまったり、その子についてじっくりと目をとめてみるという時をもたないままに保育終了時をむかえることのないように心がけることを忘れてはならない。個々の子どものもつ普遍的なよさを十分みとめ、かけがえのない大切なものとして成長していくように個々の子どもを導いていくことが大切である。

次に言語および運動能力についてみると、言語面において見出される特徴は幼児語、幼児音、発音不明瞭など、いわゆる発語上の問題をもつものはB群に多く、表現力、自発的な表現内容など自分の意思を他に表現するという点において問題をもつ者はA群に多くみられる。このことから、言語面として大きく特性を考えると両者の間の差はみられないが、発語と表現の二つにわけて考えると、A群、B群の間にはかなりの差のあることに気づかされる。

幼児語、幼児音、集会活動中の奇声など、目に立つ発語上の問題点をもつ子は、教師の目につきやすく、家庭でも就学までにはなんとか矯正したいと願うので、常に教師の意識の中にとどめられやすいが、同じ言語上の問題点をもつ子どもでも、是否のはっきりした問題即ち「はい、いいえ」の一言ですまされるもの、あるいはことばを用いないで動作業のみの場合はよく答えるが、「どうしてそうなるか」「どこがちがうか」というように、自分の意見を求められると、非常に消極的になり、理解はしているがうまく表現できないといった場合は、それが日常保育においては、さほど目に立つことではないし、家庭においても、日常の会話がスムーズにうけこたえてきていけば、生活の上に支障をきたすこともないので見すごされがちとなる。

これは、「家庭における言語活動の調査」においても、幼児語、幼児音をもつ子の家庭では約八七％が、この点に気づき、矯正したいと思っているのに比べて、A群の語彙や表現力については「園のことをあまり話さない」という点では共通しているが、「家庭ではことば数が多い方」というのが五七％「言語活動上の問題点はない」と回答しているものが約七六％を占めており、問題があると感じている約二四％のものほとんどが、ことばはいちちらんぼうなことば、流行語、親に対する口ごたえなどという点においての問題を感じているところから、A群の子どもたち

の言語表現上の問題は、その本質的なものをうけとめられないままに、家庭においても、また、園においても見すごされているのではないかと考えられる。

きょうだいがいるということは言語発達上望ましい面は多くみられるが、その反面、その子一人のことばについて、よく吟味し、心をとめてみる機会が少なくなることも一因と考えられる。

このように、A群、B群間の差が、身体および運動能力面でみられるよりも（もちろん、運動能力面においては、運動能力測定において、全種目ともすぐれている子、その反面、劣っている子などはB群に多くみられ、このことが、運動会あるいは、体育的なあそびなどでの目だつ原因となっていると考えられるが）言語面での特徴の方にあることを考えると、A群即ちめだたない子のほとんどは、十四名中十名約七〇%のものが共通にもっている語彙、あるいは表現力の乏しさを、積極的にとりあげて、保育の中で、あるいはあそびの中で、指導していくことが必要であると思われる。それは、単にこの子たちを「めだたせる」ためではなく、「自分の考えを適切に表現できるようになること」は、この子たちの将来にとっても大切なことであると考えられるからである。

あそびへの参加については、観察期間が、年長児も最後の段階に至っての観察であるので、いわゆる集団に入れなくて孤立して

いる子というタイプは見うけられない。しかしA群の子どもはB群の子どもよりもあそびにおいても消極的な参加をしているのではないかと予測に反して、有意差があるとはいえないが、9の交友関係の項にみられるように、AはAどうし、BはBどうしの交友が多く成立して、それぞれにおいて、自発的に意欲をもってあそびにとりくんでいる。

ここで目につくことは、A群の方は、男女ともスベリ台、ブランコ、砂場、ままごと、自由画、折紙、積木など遊具や教具をつかつての即ち物を媒介としてのあそびが多く成立しているのに対して、B群の方は怪じゅうごっこ、潜水艦ごっこ、幼稚園ごっこ、サリーちゃんごっこ、わらべうたあそびなど、物を媒介としないで、人と人との交わりの中で、話しあいにより、またリーダーの提案によって発生し、展開していくあそびが多くみられることである、この点については、今後の研究の課題として、保育者としてどのような配慮が適切であるのか、また、単に現象面でのちがいであるとしてうけとめていくことがよいか考えていきたい。

あそびについての今一つの特徴はB群の女兒中12にみられるように、つねに教師のまわりにおいて、話しかけたり、ボールあそびをしたりして離れない子どもたちがあり、全員が第1表のように、記憶にもとづく観察面では△印のついた子どもたちである。この子どもたちの共通した現象面としては、自意識が強く、一対一の対人



関係はきわめてよいが、集団の中になると能力が十分發揮できないタイプである。記録者のうちで、この面に気づいたものはB群の子として毎回記録し、その変化のようすを記述しているが、単に集団の中での本児の姿のみに目をとめていたものは、不活発ではあるが集団を逸脱するほどでもない行動が目にとまらず、A群の子として把握している。

このように保育者によってうけとめ方が異なるということはもちろん、実習生であるので、これだけをもって論拠とすることはできないが、一人一人の子どもの場面からかたよりなくとらえることの重要性を考えさせられる。

両親との交わりについて「毎日あそぶ」と答えたものはB群の約五〇%、それに比べてA群は七%とずっと割合は低くなっているが、「時間のある限りあそぶ」と答えているものはA群の方が多く六四%を占めている。また、全くあそばないと答えたものはA群にはみられずB群に約二〇%みられる、このことから、B群の両親の方が子どもとの交わりに熱心であるようにみうけられるが、しかし、内容的には交わりを密にしているものも多いが、ほとんどしていかないものもあるというように扱い方に差があり、また幼児自身への人形あそびを通しての質問をまとめると、B群の「毎日あそぶ」と答えたもののうちのかなりのものがその内容として、「本をよんでもらう」「パズルをする」「字などのお勉強

をする」「オルガンをひく」といったように、共にあそぶというよりもむしろ母親からの働きかけによるお勉強的なものにウェイトがかけられ、それをもってあそんでいると考え、またその気持の中にはあそばなければならないという観念が動いているようにみうけられる。母と子の交わりは、もっと自然に、母にとっても子どもにとっても楽しいものとなるような配慮が望ましく、それについては、保育者の家庭に対する働きかけよっての改善が期待される。この結果を通して、この種の事項は、調査表の数字のみではなく、内容面での裏付けをしていくことの大切さを考えさせられた。同胞数についてみると、A群にはきょうだいをもつものが多く、B群には一人子が多い。

今回の調査による結果だけで一つの傾向と考えることはできないが、今回の調査結果を検討すると、A群中の一人子一名には年齢差のない叔母が同居しているので一人子的要素はうすいものと考えられ、反面、B群中の同胞をもつものうち六名約五〇%のものは、六歳以上の年齢差のある上、または下の二人きょうだいであるので、一人子的要素を多分にうけとめて成育しているものと思われる。この点からもB群においてはいろいろな面での個性が強くあらわれている子どもも即ち目だつ子どもも多く、A群においては集団に入りやすく、また身辺自立のよい反面、一対一で親からことばを語りかけられ、応答を求められる機会が、B群の

子どもたちにくらべて少なかったために、（これは、心理的な親子分離がはやくできるとか、年齢不相応のことばづかいを教えこまれることが少ないというよい点も考えられるが）言語表現上、不十分な面が、多く生じたのではないかと思われる。この点については今後の課題として更に研究を継続していきたい。

### △まとめ▽

以上の結果にもとづいて、めだたない子の特性を考察すると、これらの子どもたちは、幼児としての年齢的なレベル——普遍性を十分に備えている者が多いということである。

私どもは、ともすれば、個々の子どものもつ目に立つ能力や発達差には鋭敏であるけれども、その年代としてふさわしい言動を行なっているものに対してはあまり目をとめて考えようとはしない。ことに、人格的特性のうち、その一つ一つの現象面をとりあげてみると、ほとんどその年代のものもっている普遍的なものであると、それがくみあわされて、かけがえのない人格形成の基礎となるであろうと思われる場合でも、つい見すごしてしまいがちであることに気づかされる。

幼児期においては、無理に一つの特徴を見出してこれを伸ばすことに集中したり、どれも標準まで到達させなければと就学をめざしてせっかちに教えこんだりすることは望ましい方法ではな

い。何か一つの強い特徴があればそれをもってすべてがカバーされたと考えたり、知能や才能がすぐれていることが、人間性のすべてであるかのような考え方は幼児教育においては適切ではない。一人一人の子どもをその子らしく、ゆたかな心情が育つように保育していくことが大切であると思われる。

めだつ子についても、めだつ原因としての強い個性をもたらしただものは何であるかをよく考え、その個性をいかにうけとめていくことがその子にとって幸せなことであるかを考慮して適切な指導がなされなければならない。集団の場において逸脱しがちな子どもを、集団からめだたなくすることに指導の重点をおくのではなく、その子とまわりの子どもとの関係で、いかにすればその子の個性もいかされ、また集団もたかめられていくかを考えての指導が望ましい。

もちろん、ここで忘れてならないのは、個人を大切にすることということは集団をおろそかにすることではないし、また、ここであげられためだつ子、めだたない子という分類はあくまでの現時点での現象面であって、いつまでも、この尺度でその子の全体をおしはかつてはならない。子どもたちは日々成長し、変化しているのだから、保育者も、子どもに対する把握を固定観念をもってするのはなく、日々子どもの成長と共にそこでの望ましいふるまい方、指導の方法を考えていくことが大切である。